

都道府県別賞一等

生命保険と生きた証

熊本県 熊本市立長嶺中学校 二学年

友田 安美

生命保険とは、被保険者の死亡または一定の年齢に達するまで生存したことを条件として一定の金額を支払う保険のことをいう。私は「生きた証、生きるということの大切さ」だと考えた。

それは、どんな苦悩があってもたえぬいてきたからである。私がこのように考えるようになったのは昨年天国へ行った祖父とのなにげない会話だった。

「あとのくらい生きられるかな。病気はこれから先ずつと治ることはないけど、毎日毎日楽しく過ごせるかが大事だと思うんだ。」

と祖父は言った。私はこのとき祖父が急にこのようなことを言い出したのでおどろいて、

「どうしたの。」

の一言しか言えなかった。すると、

「ごめん、ごめん。なんでもないよ。」

と言って祖父との会話は終わってしまった。まさか、この会話で、「最後」になるとは考えてもみなかった。祖父は、パーキンソン病を十年以上前から、心臓病を五年前から発症していた。祖父は祖母にいつもあやまっていたと聞いたことがある。それは生命保険に入っていなかったからだそうだ。もしも入っていれば迷惑をかけなくてすんだのにと。

それからの祖父は、家族や親戚に生命保険に入るように話をしていたらしい。私はこのことに気づかず、祖父が病気ということも知らずに一緒にいた。一緒にいた時間、祖父を喜ばせたり笑わせたりできていたのだろうか、文句を言っってしまったのではないかなど、祖父が突然私の前から消えてしまった日、そのことだけを必死に祖父に訴えた。しかし、当然返事が返ってくることはなくひたすら泣いた。祖父からは手紙が残されていた。文章は短かく字はとても汚かった。けれど紙が水にぬれてできるしわが何カ所かあった。たぶん祖父は泣きながら書いていたんだと思う。その手紙を私はさらにしわくちゃにしてしまった。そこには、

『どんなに悲しいことがあっても負けるな、絶対そばにいるよ。じいちゃんができなかつたことをばあちゃんにしてあげてね。あとのことを良く考えて行動するんだよ。これからも笑わせてね。』

と書いてあった。『できなかつたこと』が何かは全く分からなかった。

第54回中学生作文コンクール

しかし、今中学二年生になって、祖父がある日言い出した言葉や手紙の内容がやっと分かった気がする。毎日毎日を楽しく過ごせという言葉は後悔を未来に残すなどということだと思う。これは私なりの考え、生きた証をつくることにもつながる。

私は、祖父が伝えてくれた言葉を決して忘れることはない。祖父が生命保険に入っていないことを後悔していたことも忘れない。これから私が生命保険に入ることが必要だからだ。生命保険に入るとは、家族を守ること、家族を笑顔にすることにも繋がる。だからこそ私は、生きた証、生きるということの大切さを忘れない。